

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 许 临 扬

論文題目

認知言語学的な観点から見た日本語の「完了」アスペクトの形式

### 論文審査担当者

主 査 名古屋大学教授 玉岡 賀津雄

委 員 名古屋大学教授 堀江 薫

委 員 名古屋大学准教授 鷺見 幸美

委 員 沖縄国際大学総合科学部英米言語科・講師  
里 麻奈美

## 論文審査の結果と要旨

### 【論文の意義】

本博士論文は、認知言語学の観点から、寺村(1984)の形態論による一次的、二次的、三次的アスペクトの分類を基に、中国語との対照研究を行った。まず、本研究は二次的アスペクト形式「-ておく」、「-てある」、「-てしまう」が表す「完了」の意味的な特徴を考察することによって、二次的アスペクトが表す「完了」は、ズームアウトし、全体を捉え、隣接する時空間も視野に入れるという特徴を持つことを明らかにした。次に、三次的アスペクト形式である「～切る」、「～抜く」、「～通す」が表す「完了」の意味特徴を考察することによって、三次的アスペクトが表す「完了」は、ズームインし、最終的な境界線に焦点を当てる特徴を持つことを明らかにした。そして、「継続」の概念に対立し、一次的アスペクト形式である「る」形が表す「完了」、すなわち、出来事をひとまとまりに捉えるという意味特徴を持つ「る」形は、二次的アスペクト、そして三次的アスペクトが表す「完了」と異なることも明らかになった。最後に、二次的アスペクトの「-ておく」、「-てしまう」、「-てある」、そして三次的アスペクトの「～切る」、「～抜く」、「～通す」と中国語との対照を行い、両言語の相違点と共通点を検討した。以上のように、本研究は、認知言語学的な観点から日本語の「完了」アスペクト形式を総括的に検討した点で意義がある。そして、中国語は「結果の在り方」に注目するという特徴から中国語も日本語と同様に、階層的な捉え方でアスペクトを総括的に捉えられるという提案にも意義がある。

### 【論文の概要】

本博士論文は、「完了」の意味特徴をめぐって、認知言語学的な観点から日本語のアスペクト形式を検討した。現代日本語のアスペクト研究に関して、鈴木(1957)をはじめ、奥田(1977)、工藤(1995)、などは「完成相」を表す「スル」(シタ)と「継続相」を表す「シテイル」(シテイタ)の対立を日本語の形態論的なカテゴリーのアスペクトとして規定し、「-てしまう」のようなテ形補助動詞や、「～切る」のような複合動詞などを機能・意味のカテゴリーとしてのアスペクチュアリティーの中で扱っている。こうした立場とは異なり、寺村(1984)は日本語のアスペクトを一次的アスペクト、二次的アスペクト、三次的アスペクトに分け、「する」を「未然」を表す形とし、「した」を「已然」を表す形とし、一次的アスペクトとして両者を対立させている。そして、奥田(1977)や工藤(1995)などが排除した「-てしまう」のようなテ形補助動詞を「-ている」と同列に扱い、文法形式化した二次的アスペクトと規定し、さらに「～切る」のような複合動詞を三次的アスペクトとしている。このように、「完了」か「継続」かの対立を中心とする「出来事の時間的展開性(内的時間)の把握の仕方の相違」(工藤 1995: p.8)を表すアスペクトについて、現代日本語において、基本的な規定から体系的な捉え方まで意見が分かれている。そこで、本研究は、「完了」の意味特徴を中心に、寺村(1984)が形態論の観点から分類した一次的、二次的、三次的アスペクトが意味の観点から、それぞれどのような「完了」の意味特徴を持っているのかを検討した。

具体的には、第 1 に、二次的アスペクト形式の中から「-ておく」、「-てある」、「-てしまう」

を取り上げ、意味分析と意味比較を行った。第 2 に、三次的アスペクト形式の中から「～切る」、「～抜く」、「～通す」を取り上げ、意味分析と意味比較を行った。第 3 に、第 1 と第 2 で分析した 6 つの形式が表す「完了」の意味特徴を、一次的アスペクトの「する」が表す「完了」の意味特徴と比較し、その共通点と相違点を考察した。更に、二次的アスペクトの「-ておく」、「-てしまう」、「-てある」、そして三次的アスペクトの「～切る」、「～抜く」、「～通す」を中国語と対照し、両言語の相違点と共通点を検討した。各章の概略は以下の通りである。

第 1 章では、本研究の全体像を提示した。まず、現代日本語のアスペクト研究を概観し、先行研究で言及している様々な「完了」の意味をまとめた上で、本研究における「完了」の意味を認知言語学的な観点から定義した。次に、寺村(1984)の形態論の観点から分類した一次的、二次的、三次的アスペクトを、本研究で定義した「完了」の意味に基づき、体系的に捉え直した。そして、本研究の研究対象となる 6 つの形式、すわなち、補助動詞の「-ておく」、「-てある」、「-てしまう」及び複合動詞の「～切る」、「～抜く」、「～通す」をその体系の中に位置づけた。最後に、このような階層的なアスペクト体系を持つ日本語と言語の系統が異なる中国語との対照研究を行う理由を述べた。

第 2 章では、まず、研究対象となる二次的アスペクトの「-ておく」、「-てしまう」、「-てある」、そして、三次的アスペクトの「～切る」、「～抜く」、「～通す」に関する先行研究の中で代表的なものを取り上げ、概観した。次に、本研究の研究目的から見た場合に、研究対象となる 6 つの形式にどのような問題点があるのかを提起し、本研究のアプローチを述べた。

第 3 章では、先行研究で論じられている「-ている」の用法を中心に述べた。「進行」を表す「-ている」は、出来事の部分に焦点をあて、ひとまとまり性を持ち、「完了」を表す「する」と対立している。一方、「結果状態」を表す「-ている」は、「完了」をベースにした「結果状態」を表す二次的アスペクト形式「-てある」と緊密な関係があり、「過去に実現したことの結果として現在の状態を述べる」(寺村 1984: p.147)との意味から、「-ている」には二次的アスペクトの特徴も見られる。次に、「結果状態」の意味において、「-ている」と相補的な関係にある「-てある」は、ムード的な「準備」の意味において、「-ておく」との類似性が見られる。そこで、「-ておく」と「-てある」はそれぞれどのような「完了」、そして、どのような「準備」の意味を表すかを明らかにするため、認知言語学的な意味関連の観点から「-ておく」の意味分析を行った。「場を占める」という「置く」の実空間における具体的な意味から、「-ておく」の抽象的な拡張義への繋がりを検討し、「持続」や「準備」などの用法をすべて「場を占める」という意味で統一的に説明できた。それを踏まえ、「-てある」の意味との比較を行い、「-てある」と「-ておく」は前接動詞の出来事をまるごと捉え、更に隣接する時空間を視野に入れる点が共通しているものの、区切られた時空間の関わり方の違いが原因となり、両者が表す「準備」の意味が異なる。

さらに、テ形に接続する補助動詞の中で「完了」を表すと言われている「-てしまう」がどのような「完了」の意味を表すのかについても考察した。考察に当たって、本研究では「-てしまう」が表す「完了」の意味特徴を①～③にまとめた。①事態の内部構造に入ることがなく、外側からの視点で事態をまるごと捉える。②事態実現の境界線に焦点を当てる。③事態は実現する前の状態を視野に入れ、実現した後の状態との対比の中で事態の「実現」を述べる。以上の考察を通して、次のようなことを明らかにした。「る」形の一次的アスペクトの「完了」は

「継続」の概念に対立するものであり、出来事をひとまとまりに捉えるという「完了」の意味を表す。そして、テ形で接続する二次的アスペクトの「-ておく」、「-てしまう」、「-てある」は、ズームアウトし、出来事全体を捉える「完了」として、一次的アスペクトの「る」形と共通している。一方、これらの形式は出来事が「完了」なのか「継続」なのかに焦点が当たっておらず、出来事の「完了」をベースに隣接する時空間の出来事との関係を視野に入れる点が一次的アスペクトと異なる。更に、隣接する時空間の出来事との関係に焦点が当たっているがゆえに、二次的アスペクトの「-ておく」、「-てしまう」、「-てある」には「準備」や「マイナス評価」などのムード的な意味を伴うことを明らかにした。

第4章では、先行研究で「完了」を表す形式として扱われている複合動詞の「～切る」、「～抜く」、「～通す」は、どのような「完了」の意味を表すのかという点をめぐって、意味分析と意味比較を行った。まず、最初に「～切る」の意味分析を行った。「モノの切断」という基本的な意味を持つ「～切る」の「動作の完遂」というアスペクトの意味への変容は、一足飛びに起こるのではなく、その中間に変化動詞と結合する「～切る」の用法が存在する。変化動詞と結合する「～切る」から動作動詞と結合する「～切る」への意味拡張の中で「変化スケール」が注目され、橋渡しの働きをしている。つまり、動作動詞は目的語と共起することによって獲得した動作対象の「変化スケール」に注目することによって、動作対象がゼロになった時点が、動作の完了時点となる、というのが「～切る」の表す「完了」の意味である。

次に「～抜く」の意味分析を行った。「～抜く」の意味分析では、「～抜く」の基本的意味を「拔出」と「貫通」の2種類に分け、「貫通」の意味は空間での抽象化を起こし、「目標物を追い抜く動き」の意味に変容する。そして、更に時間にも拡張し、「目標実現の追求」というアスペクトの意味と結びつく。「目標実現の追求」とは目標に向かって、時間の流れの中で、段階的な動作の実現という意味であり、これが「～抜く」が表す「完了」の意味特徴と考える。最後に、「～切る」、「～抜く」、「～通す」の意味比較を行った。三者の意味比較を行う前に、「～通す」が表す「完了」の意味特徴を検討した。「～通す」は「～切る」、そして「～抜く」と異なり、始点から完了時点までの動作の過程そのものに注目する特徴を持っていることを明らかにした。

このように、「～切る」、「～抜く」、「～通す」は「完了」という意味においては同様だが、完了時点に至るまでのプロセスにおける焦点の当て方によって、「～切る」、「～抜く」、「～通す」が表す「完了」の意味合いに違いが出てくる。そして、「完了時点に至るまでのプロセスの違い」という特徴がズームインし、最終部分の境界線に焦点を当てる「完了」であり、「ズームアウトし、出来事を全体として捉える」一次的、二次的完了アスペクト形式との違いも明らかにした。

第5章では、以上考察してきた二次的アスペクトの「-ておく」、「-てしまう」、「-てある」、そして三次的アスペクトの「～切る」、「～抜く」、「～通す」と中国語との対照を行い、「完了」を表すアスペクト形式について両言語の相違点を考察した。更に、両言語に見られる共通点も検討し、認知言語学の意味の観点から日本語と中国語のアスペクト体系を見直す可能性を探ってみた。まず、中国語のアスペクト研究について概観した。次に、二次的アスペクト形式「-ておく」、「-てある」、「-てしまう」と中国語との対照を行った。対照を通して、日本語の二次的アスペクトが表す「完了」、すなわち、ズームアウトし、全体を捉え、更に隣接する時空間

を視野に入れるという特徴を持つ「完了」の捉え方は中国語では言語化しにくいことを明らかにした。

さらに三次的アスペクト形式「～切る」、「～抜く」、「～通す」と中国語との対照を行った。対照にあたって、日本語の三次的アスペクトが表す「完了」は完了時点とそこに至るまでのプロセスに注目する特徴を持っているのに対して、中国語はその両方を同時に言語化することが難しいことを明らかにした。最後に、「完了」をめぐって、日本語と中国語のアスペクトの相違点をまとめ、両言語のアスペクトに見られる共通点を探ってみた。日本語の二次的アスペクトは隣接する時空間を視野に入れる特徴、そして三次的アスペクトはプロセスと完了時点の両方に注目する特徴は「なる」型言語の特徴の現れである。それに対して、中国語は「する」型言語の特徴、つまり、「結果の在り方」に注目する特徴を表している。それが原因として、両言語は「完了」を表すアスペクト形式に異なる発想による大きな違いを見せている。しかし、「結果の在り方」に注目するという中国語の特徴もズームインし、出来事の部分に注目する「完了」の捉え方である。そのため、中国語も日本語と同様に、階層的な捉え方でアスペクトを総括的に捉えられると考える。つまり、ズームアウトし、出来事を丸ごと捉える完了形式の“了”と、ズームインし、出来事の部分に注目する完了形式の結果補語や方向補語などに分かれる。

第 6 章は、第 2 章で提起した問題点の回答を述べ、本研究の意義をまとめた上で、今後の課題を提起した。

### [論文の評価]

口述試験では、以上の論文について、審査員から以下のような質問およびコメントがあり、論者との質疑応答が行われた。

1. 日本語と中国語を対照した考察が論文の中で展開されているが、なぜ中国語と対照するかの目的が明記されていないとの指摘があった。これについては、日本語特有の特徴かどうかを検討するために中国語を比較対照としたという回答であった。実際、日本語にあるような一次的、二次的、三次的という区別は中国語にはなく、日本語独特な特徴であることを確認した。両言語での違いをみることで、はじめて日本語の特徴がみえてくる。このような位置づけを、論文の中に記述してほしいとの指摘があった。

2. 中日対照コーパスの内容についての記述がなかったので、それについての詳細な説明が欲しいという意見があった。コーパスは、小説が 40 冊分ほどで、あまり大きなコーパスではない。こうした記述を追加することになった。

3. 日本語との対訳としての中国語をみているが、これが逆に中国語から日本語であれば、どうなるのかとの指摘があった。アスペクトがどのように変わるか。中国語の日本語訳におけるアスペクトのズレがあれば、研究として面白いであろうとの提言があった。

別紙 1 - 2

4. 日本語の4分類 (p.58) がすでに定義されているので、中国語と比較する際にも、それらの基準を使う方がよいのではないかとの指摘があった。

5. 「9割程度の用例は中国語に表現されていない」 (p.85) とされている。この違いは日中対照においてきわめて重要であろうとの指摘があった。

6. 中国語にもアスペクトが複数あり、アスペクトの階層性があるのではないか。日本語のように、一次的あるいは二次的アスペクトくらいの違いはあるのではないかという指摘があった。さらに、中国語にも、結果補語については三次的アスペクトがあるかも知れないとの追加のコメントもあった。そのため、中国語のアスペクトに階層性が無いということにはならないであろうとの疑問が提示された。もう少し日中対照を膨らませて、この点について論文の最終提出前に加筆を行うことになった。

7. メタファーについては(p.46)、意味拡張のためのために使われているが、論文からは理解し難かった。本論文ではこの概念は使っていないようであるが、意味拡張について議論する限りでは、メタファーの定義は避けられないので、もう少し説明が必要であろうとの指摘があった。この点については、4名の審査員全員で審議し、むしろメタファーについては削除して、日中対照を強調した書き方にするのが良いであろうという提案を行うことになった。論文の最終提出前に訂正することになった。

8. 「一ておく」自体で意味がきまるのではなく、前項動詞によって定義されるのではないか。なぜ、「一ておく」の4分類なのかとの指摘があった。この点については、本研究のアプローチとも関連するので、現状のような分析で本研究を完成することになった。

9. 寺村 (1984) の3つの分類については、文法化の違いとしてみることが多いが、認知言語学的な意味的観点から取り上げたことについて、着想の面白い論文であるとの好意的な意見があった。ただ、もう少し中国語とのアスペクト体系との違いとかについても議論しても良いのではないかとの提案であった。

10. 先行研究に基づいて博士論文執筆者の論理を展開するという書かれ方をしているため、先行研究と筆者の理論とを切り分けをはっきりする必要があるだろう。書き方で工夫をしてほしいとの指摘があった。

11. 文法化の程度については、日本語では、一次アスペクトは文法化が進んでいる、二次はやや文法化が希薄、三次はかなり希薄という違いがある。こうしたことは中国語にはみられるのか。そう

したことについても議論を含むとよいであろうとの意見があった。

12. 参考文献は引用したものだけに限定した方がよいであろうとの指摘があった。

13. 個別形式の考察は充実しているが、理論的な背景および中国語との対照が手薄なので、時間があれば、多少の加筆してほしいとの意見があった。

14. 意味拡張という点では、イメージスキーマが記述されているが、その概念も捉えきれていないのではないか。図式が変わること自体が、すでにイメージスキーマの変容あるいは焦点化などがかわっているはずである。そうした理論的な背景を明瞭に示して欲しい。第3章が浮いているように見えるのは、この点が不足しているためであろうとの指摘があった。

最終的に博士論文を提出するまでに、以上の14点の指摘や意見を基に訂正および加筆を行うことになった。その結果、前後するが、この報告の「論文の意義」と「論文の概要」に書いたような論文構成および展開となった。

#### **[論文審査委員会による合否判定]**

以上のようにさまざまな指摘、改善点、今後の検討についての助言があったが、それぞれの点について適切な回答が得られた。また、その後、必要な部分の訂正と加筆が行われた。全体として本論文は質量ともに博士課程後期の学位論文としての基準を十分に満たしていると審査委員会の全員一致で判断した。したがって、本論文を合格と判断した。